

斎藤貴男さん

ジャーナリスト

いま、何を取材し、どう書くのか

雑誌の休刊が相次ぎ、発表の場が失われていくジャーナリストやノンフィクションの書き手たち。そんな中で、気骨の社会派として、ぶれない姿勢を貫いてきた斎藤貴男氏は、いま何を考え、何をしようとしているのだろうか。現状への実感と、その目指すところを聞いた――。

雑誌の廃刊とジャーナリスト

――『PLAYBOY』『論座』『月刊現代』などの月刊総合誌が廃刊しました。ジャーナリストとしての仕事はどのように変化していますか。

いま生きている時代や現実をしっかりと見据えたい。私はそんな気持ちでルポルタージュやノンフィクションを書いてきました。しかし、その受け皿になっていた月刊総合誌が少なくなつて、残っているのは自民党政治や多国籍企業などのスポンサーに近い、オピニオ

ン誌ばかり、その一方で新聞やテレビなどの組織ジャーナリズムはといえば、批判精神をなくして権力側の情報を伝達するだけ……。

けれど、そんな状況だからこそ、フリーランスのジャーナリストの存在意義が高まっているとも思うんですね。ひとりのジャーナリストとして、興味のあるテーマを取材して、読んでもらう。いまはその原点に立ち返り、そこに徹したいと考えています。

発表する場が少なくなったといっても、なくなったわけではありません。私の場合、最近では月刊総合誌に代わって、ウェブマガジンや出版社のPR誌でノンフ

イクシヨンを発表する機会が増えてきました。

——この春に刊行された『強いられる死―自殺者三万人超の実相―』（角川学芸出版）も角川学芸出版のウエブマガジンの連載をまとめたものでしたね。

これは「社会的な殺人」という観点から自殺を書いてみようと思つて取り組んだ本です。

私が『機会不平等』（文藝春秋）を書いた九年前、す



●さいとう・たかお 一九五八年東京都生まれ。早稲田大学商学部卒業。イギリス・パーミンガム大学修士（国際経営M.A.）。新聞記者や週刊誌記者などを経てフリージャーナリスト。格差社会や政府による情報統制などに対し鋭く切り込む。著書は『カルト資本主義』『機会不平等』『非国民』のすずめ』『安心のアナスタスム』『心』が支配される日『強いられる死―自殺者三万人超の実相―』など多数。

でに日本の年間自殺者数は三万人を超えていました。以来、自殺者数が三万人を下回った年はありません。

『機会不平等』では、教育や派遣労働などの現場を訪ねました。構造改革の結果、平等や機会均等という建前すら取り払われて、教育では富裕層とそれ以外とが分けられる。そして、エリート以外は派遣やアルバイトといった非正規の労働者として、権利も何もない働き方を強いられる。取材を進めるうち、構造改革で格差が広がっていけば多くの人が自ら命を絶たざるをえない状況に追い込まれるのが分かってきました。

フリーライターには、人間が好きで人について取材したいというタイプが多いんですが、私は少し違います。社会のシステムや構造、制度を書きたいと考えているせいか、人に対してはクールすぎると言われることが多いんです。ところが、この『強いられる死』の取材では、多くの遺族の言葉を聞いて、裁判記録に目を通していくうちに、仕事が辛くなってきた。追い詰めてられて人生を捨てざるをえなかった人たちの無念な思い、そのダメージが私のなかにも蓄積されていくように、原稿が書けないんです。

それでも取材を続け、少しずつ筆を進めていくうち